

「満州」の想像以上の厳しい寒さも加わって、相当活力を失っていたのだろうか。

八月終わりの丹東の街は、大通りの銀杏並木が豊かな緑の木陰をつくり、さわやかな風が心地良い。林立する高層ビルの一方で、路地を入れば市が賑わいを見せている。芙美子が一月の荒涼とした鴨緑江の風景ではなく、この秋へと向かう季節に訪れていたならば、どのようにこの丹東を、この河を描いただろう。

国や人の思惑などとは無縁に、歴史を超えて鴨緑江は今も悠々と流れている。

特集・林芙美子生誕一〇九年

林芙美子と大泉淵、そして大泉黒石

久保卓哉

朝日新聞の記事は衝撃的だった。林芙美子の書斎の前で林福江さんと大泉淵さんが語り合う写真が載ったからだ。

写真だけではない。芙美子の最期を伝える淵（以下敬称略）の証言が新聞に出たからだ（「昭和史再訪」二〇一二年六月三十日）。淵が語る芙美子の最期は池田康子の『フミコと芙美子』（市井社 二〇〇三年）で公になって以降、どの出版物にも引かれなかった。だから、この度新聞に出た意味は大きい。

芙美子が尾道の高等女学校に通っていた時、よく読んだ作家に泉鏡花と大泉黒石があった。黒石には『大泉黒石全集』全九巻（緑書房）があり、「老子」や「人間廃業」は

ベストセラーとなり、『ロシア文学史』は今も講談社学術文庫に収められている。

その黒石が芙美子の隣の家引越して来たのは、パリから戻って住んだ下落合の西洋館だった。芙美子がどれほど喜んだか容易に想像がつく。黒石は本名をアレキサンドル・ステパノビッチ・キョスキーといい、ロシア人の父と日本人の母の間に生まれた傑物で、映画俳優大泉晃の父でもある。

黒石には淵という娘がいて、毎日のように遊びに来る淵を芙美子は可愛がった。芙美子の「柿の實」（昭和九年）に『をばさまおちことですか？』下から二番目の淵子ちゃ

（くぼ たくや）1947年生。福山大学名誉教授。近著「内山完造宛林芙美子書簡見つかる 昭和5年満洲上海への旅」2012年、「林芙美子と魯迅そして内山完造」2012年、「林芙美子と凍れる大地 満洲宝清への旅」2011年等。

え、二人を引き合わせるためであった。淵は、玄関に出て来た荷風の風貌を忘れることができないう。昭和二十年の空襲で焼失したあの偏奇館は、荷風の姿と共に淵の目に焼き付いているのである。

三島由紀夫は、四の坂の家に来たと言う。芙美子が留守の日で、玄関に人が見えたように思い、いつものように淵が出た。戸を少し開けると三島由紀夫が立っていた。初対面だったがすぐに三島だと分った。淵は戸の隙間から三島をひと目見て、直感的に「危険な人」と思ったと言う。おばさまは外出中ですと言うと、三島は持って来た封筒を差し出して「これを先生にお渡し下さい」と言い、中に入らずに帰った。後に三島があのような事を起こした時、淵は戸の隙間から見た三島の鬼気的な気魄を思い出して、ゾクツとしたと言う。

三島が渋谷大山の平岡邸から出した芙美子宛の手紙が残っている。昭和二十五年一月三十日の消印がついた封筒には、俳優座の観劇券と一枚の便箋があり、「御変りいらっしゃいませんか？ 早速ながら、昨年書きました戯曲『燈台』を自分の演出で上演いたしますので、もし御都合よろしき節は御一見賜はれば幸甚に存じます。(略) 匆匆 一月廿九日 三島由紀夫 林芙美子様」と書かれている。青いインクの三島の字は、水のおもてに浮かんだ油の一滴が虹を放っているように美しい。



林芙美子と大泉淵（後ろはキクと八木元八の娘まさ子
昭和13年 西洋館にて 写真提供・林福江氏）

んと云ふ西洋人形のやうな子供がうちの臺所の窓へぶらさがつてはばあと覗いた」とある「淵子ちゃん」とは、大泉淵である。

現在鎌倉に住む大泉淵は、養老孟司や村松友視の連載を収める雑誌『かまくら春秋』に父黒石のことを書いている。「性格奔放、即ち、お金があればたちどころに蕩尽し、明日の食物がなくても悠然と街中を闊歩していた。従って栄耀の座にあった時も、落魄の身になった時も、敵として彼の世界は変わらず、彼の心に不快を感じる総てのものを拒

否するか、蔑視するか、無視した」と極めて客観的に描写している。

淵は成人後も実の娘のように芙美子の家に住まい、訪れる作家や改造社、中央公論、文藝春秋などの編集者の応対に当った。

葉山の日影茶屋で名物膳を御馳走になりながら、大泉淵から話を伺ったのは夏であった。日影茶屋は夏目漱石が家族を連れて訪れ、大正五年には大杉栄が神近市子に刺された旅館である。淵は芙美子をおばさまとよび、おばさまと共に接した作家達の姿を、美しい日本語で語ってくれた。

淵の口から次から次へと登場する作家には、川端さん、吉川さん、朔太郎、永井荷風、窪川稲子、平林たい子、壺井栄、太田静子、太宰さん、織田作さん、昭子さん、徳田秋声、三島由紀夫、大佛次郎、吉屋信子、船橋聖一、田村泰次郎、高見順、村上元三、円地文子、瀬戸内寂聴、太田治子等々がいた。川端さんは川端康成、吉川さんは吉川英治、太宰さんは太宰治、織田作さんは織田作之助で、昭子さんは織田作夫人であるの言うまでもない。織田作さんをお見舞いに行ったら昭子さんがいらしてね、高見さんが具合が悪くて箱根にいらした時お見舞いに行きましたわ、ということがさらりと出てくる。

永井荷風の偏奇館には、おばさまに連れられて行ったことがあるわと言う。芙美子が聡明な淵を荷風の養女にと考

日影茶屋では、昼の膳が下げられて夕餉の客が現れても話は続いた。林芙美子が「西洋人形のやうな」と表現した私の目の前の大泉淵は、まさしく、耳に心地よい声で美しい日本語を話す、西洋人形であった。

江古田文学

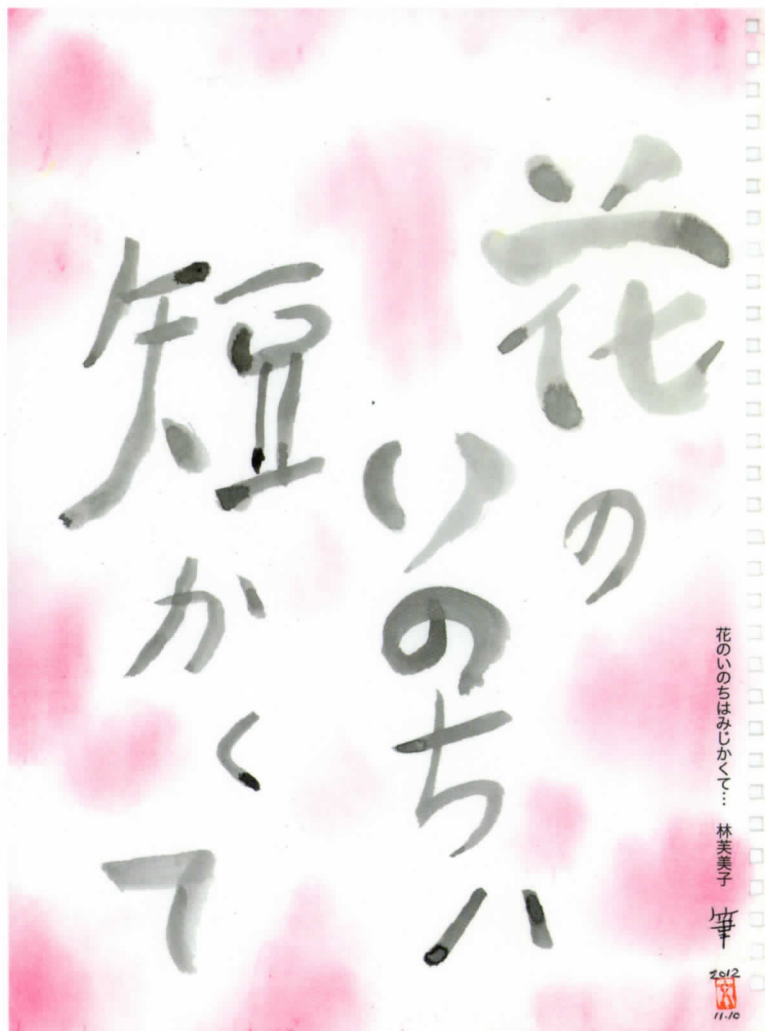
The EKODA BUNGAKU

81

Vol.32 No.2
2012 Winter

第11回 江古田文学賞発表

特集 林芙美子 生誕二〇九年



花のいちのかぐて...

林芙美子

筆

2012
11-10

特集 林芙美子 生誕一〇九年

ボクたちの、林芙美子を求めて 〓 日本大学芸術学部から林芙美子記念館への旅 構成・中原美穂子 写真・池辺祥太……9

姪・福江さんが語った 叔母、林芙美子 聞き手 清水正 山下聖美 構成・藤野智士 写真・池辺祥太……16

〓 近所に住む刑部昭一さんが語った 林芙美子の私生活 聞き書き 大和田守……24

追悼・森光子さん 〓 江古田文学七十一号の思い出……28

『放浪記』の森光子に乾杯 〓 生きながらにして(死と復活)を体現した舞台女優 清水正……30

ゆで玉子と風呂敷包み 稲葉真弓……34

『華やかな孤独 作家・林芙美子』を書き終えて 尾形明子……36

女性雑誌をめぐる日英メディア比較(覚書) 〓 『女人芸術』と『ガールズ・OWN・ペーパー』 〓 久保陽子……40

林芙美子と「満州」「凍れる大地」から 岡田孝子……42

林芙美子と大泉淵、そして大泉黒石 久保卓哉……45

風に吹かれて雲を見る 浦野利喜子……48

「深川のうなぎ屋」の正体 校條剛……50

林芙美子と作品 大庭英治……58

林芙美子の(声)から触発される裡なる声 土野研治……61

林芙美子と改造社 藤野智士……73

林芙美子の領域論 〓 女流文学との比較でみた超人文学の姿 〓 大野純弥……81

「わたし林芙美子」展について 鈴木幸野……86

林芙美子疎開先のこと 山本秀磨……88

林芙美子と鹿児島のもう一つの関係 〓 『放浪記』と『飢え』を視座に 〓 吉村弥依子……91

「歌日記」(後の「放浪記」)時代の林芙美子 清水英子……94

啄木と芙美子 〓 (放浪)と(懐郷) 〓 平岡敏夫……96

うっかり放浪記 山鹿奈音……99

『浮雲』のモデルは太宰治である 宮田俊行……102

『浮雲』のシナリオと水木洋子 加藤馨……111

過去と現在との懸隔 〓 映画『浮雲』を巡って 〓 牛田あや美……114

『浮雲』と映画『モロッコ』の謎 ゆき子とアミー 下原敏彦……120

林芙美子の南方従軍 病院船「志かご丸」のことなど 望月雅彦……123

‘ASIA RAYA’紙に報じられた林芙美子 〓 南方体験の一コマ 〓 木村一信……126

ブンガン・ソロ、南方復員兵の郷愁 林芙美子を書き留めたジャワの歌 齋島克彦……131

林芙美子ゆかりの宿(マレーシア、インドネシア篇) 山下聖美……134

芙美子女史と上林塵表閣 上林温泉 塵表閣 女将・小林美知子……144

林芙美子さんが繋ぐもの 旧延命院 お宿諏訪 女将・諏訪香織……146

21世紀、直江津に林芙美子現る?! なおえつ茶屋 女将・花柳紀寿郎……149

芙美子とマリ子 「尾道 林芙美子の会」の活動とともに 尾道 林芙美子の会 会長・小森マリ子……153

いまさら連句会 オン座六句『ちあきなおみの夜』の巻 浅沼璞捌……156

ちあき&芙美子リミックス 〓 「ちあきなおみの夜」留書 浅沼璞……158